

畳語副詞の意味

成分の意味とのかかわり

譙

燕

I はじめに

畳語副詞は同一成分の重複によって構成されたものなので、成分の意味が分かれば、畳語副詞全体の意味を引き出せると思われやすいが、確かに一部分のものについては成分の意味から見当がつく。しかし、成分のなかには副詞だけでなく、他品詞のものも多数存在する。そういった構成上の特色から成分と畳語副詞との意味関係はそう単純ではないことが予想される。成分は畳語副詞を構成していくうえで、その意味が畳語副詞において変質するか否か、また、畳語副詞の意味とどうかかわっているのかについて、小論で検討してみたい。

II 調査の対象

調査資料としては竹内美智子氏他作成の「現行辞書における副詞一覧^①」を用いた。それを現代語中心の『岩波国語辞典』（第五版）と『学研国語大辞典』（第二版）によって確認し、古語を除いたうえで、両辞書からさらに「ぐびぐび、どたどた」など畳語副詞76語を補った。以上で得た畳語副詞は598語である。

また、考察しようとする対象の範囲を考える必要があると思われる。畳語副詞の成分としては

- (1) 名詞成分の畳語 いろいろ たびたび ときどき みちみち もともと など
- (2) 動詞成分の畳語 重ね重ね 沁み沁み 恐る恐る 泣く泣く など
- (3) 形容詞成分の畳語 あああお ちかちか ながなが ひろびろ など
- (4) 形容動詞成分の畳語 いやいや けちけち 稀れ稀れ など
- (5) 副詞成分の畳語 ただただ なおなお またまた まだまだ など
- (6) 音象徴成分の畳語^② うつらうつら うとうと かたかた こせこせ など
- (7) その他 おさおさ つくづく つらつら ほとほと など

の7種類あるが、その7種類をすべて小論の対象とするわけにはいかない。というのは、

成分がはっきりした意味を持つものでなければ、畳語副詞とのかかわりがどうなっているかに関する分析ができなくなるからである。「その他」に分類されている「おさおさ、つくづく、つらつら、ほとほと」の4語は、畳語形式でしか用いられないという制約があるため、対象から外した。すると、小論の対象となるものは594語の畳語副詞とその成分である。

Ⅲ 辞書における意味の記述

辞書はその編集方針，利用層などによって，意味記述に違いが見られるものは少なくない。例えば，畳語副詞「飛び飛び」については辞書での記述を見てみると，次のようである。

「飛び飛び」についての意味記述

	『岩波国語辞典』 (第五版)	『学研国語大辞典』 (第二版)	『新潮現代国語辞典』 (第二版)	『集英社国語辞典』 (初版)
意味記述	(副) 連続していないであそこ，こと間をおくさま。	(形動) ①いくつかの物があちこちにちらばってあるようす。点々。 ②順序をおわず，ところどころあいだをぬかすようす。	一(形動) ①物があちこちに散らばっているさま。 ②物事の順序を追わず，ところどころに間を置いているさま。 二(副)とびながら	(名ニノ) ①ところどころに散在していること。点在すること。 ②順を追うことなく，間を置くこと。

辞書によって，意味記述の方法や内容に違いがあるばかりでなく，品詞の認定についても一致していないところがあるので，ここでは主に「現象的なものよりも，その根底にひそむ根本的な意味を明らかにしようとした」(同辞典「はじめに」による)という『岩波国語辞典』の意味記述に従うことにする。

Ⅳ 成分の意味分野と畳語副詞の意味分野

成分の意味分野^③と畳語副詞の意味分野^④については先に触れたが，小論で不可欠な部分なので，あらためて次にまとめておく。成分の意味分野と畳語副詞の意味分野を考えるに当たって，それぞれについて，国立国語研究所編の『分類語彙表』の分類方法に従って分類して示した。便宜上，コード番号は類の中の上位2桁にまとめた集計結果である。

[A] 成分の意味分野

1. 体の類

1.1 抽象的關係 35語 1.10こそあど 3語 1.11関係・相互・整い方 1語
1.15変化・動き 2語 1.16 時・頻度 19語 1.17空間・場所 3語

- 1.18形状・表面 2語 1.19大小・長短・多少 5語
- 1.2人間活動の主体 2語 2.20人間 2語
- 1.3精神および行為 2語 1.30意識・感覚・感情 2語
- 1.4生産物および用具物品 4語 1.42衣料 1語 1.44家屋 1語 1.47地類 2語
- 1.5自然物および自然現象 11語 1.50光・音・色・材質 5語 1.51水分・気象・火 3語 1.52山川 1語 1.57体 2語
- 2.用の類
- 2.1抽象的關係 29語 2.12在不在・可能性 1語 2.15変化・動き 28語
- 2.3精神および行為 10語 2.30意識・感覚・感情 10語
- 2.5自然物および自然現象 9語 2.51水分・気象・火 5語 2.58生育・健康 4語
- 3.相の類
- 3.1抽象的關係 185語 3.10こそあど 4語 3.11関係・相互・整い方 7語
 3.12在不在・可能性 5語 3.13繁簡・出来 2語 3.14激力 1語
 3.15変化・動き 76語 3.16時・頻度 15語 3.18形状・表面 32語
 3.19大小・長短・多少 43語
- 3.3精神および行為 122語 3.30意識・感覚・感情 52語 3.31ことば 16語
 3.33風俗・身のふるまい 26語 3.34身上・性格 26語
 3.36対人態度 1語 3.37経済 1語
- 3.5自然物および自然現象 184語 3.50光・音・色・材質 152語
 3.51水分・気象・火 27語 3.58生育・健康 5語
- 4.その他 4.31表現態度 1語

表1 成分の意味分野

	1 抽象的關係	2 人間活動の主体	3 人間活動	4 人間活動の生産物	5 自然
1. 体の類	35	2	2	4	11
2. 用の類	29	-	10	-	9
3. 相の類	185	-	122	-	184
4. その他			1		

[B] 畳語副詞の意味分野

- 3.相の類
- 3.1抽象的關係 246語 3.10こそあど 9語 3.11関係・相互・整い方 15語

- 3.12 在不在・可能性 6語 3.13 繁簡・出来 2語 3.14 激力 1語
 3.15 変化・動き 83語 3.16 時・頻度 48語 3.18 形状・表面 34語
 3.19 大小・長短・多少 48語
 3.3 精神および行為 150語 3.30 意識・感覚・感情 64語 3.31 ことば 16語
 3.33 風俗・身のふるまい 29語 3.34 身上・性格 38語
 3.36 対人態度 2語 3.37 経済 1語
 3.5 自然現象 198語 3.50 光・音・色・材質 154語 3.51 水分・気象・火 32語
 3.58 生育・健康 8語
 4. その他 4.31 表現態度 4語

表2 畳語副詞の意味分野

	1 抽象的關係	2 人間活動の主体	3 人間活動	4 人間活動の生産物	5 自然
1. 体の類	-	-	-	-	-
2. 用の類	-	-	-	-	-
3. 相の類	246	-	150	-	198
4. その他				4	

全体的に見ると、[A]も[B]も「抽象的關係」「精神および行為」「自然現象」の三分野に集中しており、両者の各分野の語数も接近している。しかし、これだけでは、畳語副詞の分布状況がもとの成分と変わらないという結論を出すのは早い。実際、畳語副詞が各品詞成分から構成されたものである以上、各意味項目間に変動がないはずはないと思われる。まず、名詞成分に見られる1.1, 1.2, 1.3, 1.4, 1.5の意味項目と、動詞成分に見られる2.1, 2.3, 2.5の意味項目はいうまでもなく、畳語副詞には見られないものである。

具体的に成分の意味分野と畳語副詞の意味分野を比較してみると、次のようなことが明らかになった。

- a. 名詞成分が1.16の「時・頻度」の項目にもっとも多く分布しており、それらが重複してもほかへと変動しない。そのほか、次の「みちみち」のように、他の意味項目に所属している名詞成分が重複して、3.16の「時・頻度」の項目へ集中してきたものも見られる。



また、1.50の「光・音・色・材質」に分類されている「いろ」のように、重複して他の意味項目に移っていったものもある。

色 → いろいろ

(1.50「光・音・色・材質」) (3.13「繁簡・出来」)

b. 2.15の「変化・動き」に所属している28語の動詞成分が重複して3.15のこの項目に残ったのはただの3語のみで、それ以外のは3.16の「時・頻度」に「行く行く、追い追い」など8語、3.34の「身上・性格」に「ぬけぬけ」など7語、および3.18、3.19などの項目にそれぞれ変動していった。これは動詞成分が重複して、その動作性が薄れて、状態性が付与されたことを示していると考えられる。

行く → 行く行く

(2.15「変化・動き」) (3.16「時・頻度」)

c. 形容詞成分の置語はほとんど客観的性質・状態を表す属性形容詞によるもので、主観的感覚・感情を表す感情形容詞によるものは「寒々、うまうま、こわごわ」の3例しか見当たらない。また、「はやい」と「はやばや」が同じ3.16の「時・頻度」の項目に属しているように、成分とその置語副詞とは意味項目間の変動のないものが多い。しかし、

ぬくい → ぬくぬく

(3.51「水分・気象・火」) (3.30「意識・感覚・感情」)

のように意味変動のあるものも見られる。

しかし、次の「辛い」と「辛々」の場合では、

辛い → 辛々

(3.50「光・味・音・色・材質」) (3.16「時・頻度」)

に見られるように、「辛い」が3.50の項目にあるのはいうまでもなく、その「激しく舌を刺すような味」という原義によった分類である。もし、その置語の「からがら」との関連から考えれば、「辛くも」(やっとのこと)のほうがつながりが強く、むしろここで成分の「辛い」を「からがら」と同類のものとして捉えたほうが適切かもしれない。「うまうま」についてもほぼ同じことが窺われる。

うまい → うまうま

(3.50「光・音・色・材質」) (3.34「身上・性格」)

また、「薄い」とその置語の「薄々」は、同じく3.19の項目に属しているにもかかわらず、さらに細かく分類するとすれば、

薄い → うすうす

(3.192「厚い・太い・大きい」) (3.195「多い・少ない」)

のように微変動が見られ、両者の間に確かに意味の差のあることが示されている。

形容動詞成分に関しては、「けち」と「けちけち」のように、同じ意味項目に分類されているものが多い。

けち	→	けちけち
(3.34「身上・性格」)		(3.34「身上・性格」)
そのほか、		
いや	→	いやいや
(3.30「意識・感覚・感情」)		(3.34「身上・性格」)

のように成分と近いコード番号に変動したものも見られる。

- d. 副詞成分は重複して置語副詞を構成しても、「また」と「またまた」など、同様に3.16に現れるように、意味項目間に変動のないものが多い。
- e. 音象徴成分は自立しないものであるが、形式的に自立しなくても、「くるり」が「くるりと」、「きら」が「きらめく」などのように派生したりすることができて、はっきりした意味を持っているわけである。そのほか、「すすく」「わくわく」のように、置語の形をとってはじめて語として用いられるものも多いが、この場合の成分の意味を置語の意味と分けることは不可能と考えて、ここでは、成分がその置語とほぼ同じ意味を持つものとして扱うことにする。

以上、成分の意味分野と置語副詞の意味分野を比較してみた。多くの意味を有している成分に対して、意味分類は普通その原義によって行われたもので、置語副詞は成分の意味分布との間に変動が出てくるのもいうまでもないことであろう。それは置語副詞には成分の意味をすべて受け継いだものがある一方、一部分しか受け継いでいないものもあるということに関与していると思われる。次は置語副詞とその成分との意味関係について考える。

V 成分と置語副詞の意味とのかかわり

成分と置語副詞の意味とのかかわりを考える場合、まず、置語副詞において、その成分の意味が変質しているか否かを明らかにしなければならない。以下、置語副詞を構成していくうえで、成分の意味がそのまま保持されているか否かという観点から論を進めていく。なお、形容詞成分、形容動詞成分の場合はその語尾を含めて考えたものである。

V 1 成分の意味がほぼそのまま保持されているもの

この場合の成分と置語副詞の意味は全く同価ではなく、置語副詞がほぼ成分の基本的意味に等しいと見なし得るものを指す。しかし、語形が二つ存在する以上、必ずそのあ

いだに、機能の有無、程度の深浅、変化の遅速、ニュアンスの強弱などの違いがあると
思われる。ここでは、主に意味を問題にしているのので、他の面の差違についてはこれ以
上触れない。

気の遠くなるような樹海の先に青い海が輝いている。

(渡辺淳一『花埋み』)

三日前まで青々と輝いていた畑地は泥土でおおわれ、土砂と石塊がところかまわ
ず散らばっていた。

(渡辺淳一『花埋み』)

まだ微熱があるので、風呂には入れなかったが、

(渡辺淳一『花埋み』)

この世の中にはまだまだ苦しみ悩んでいる人が沢山います。

(渡辺淳一『花埋み』)

のような例では、成分が重複して強調の意が付加されただけで、成分の意味はほぼ保た
れていると見られる。この類では、音象徴成分の置語も多く見られるが、重複すること
によって、強調の意が付加されたというより、語として用いられるようになっていると
いう点では異なる。

V 2 成分の意味が変質しているもの

成分の意味が変質しているものはその変質の仕方によって、「近々」のように成分の
意味項目が削減されたもの、「高々」のように成分にない意味項目が添加されたもの、
「薄々」のように成分の意味から転義が生じたものとに分類される。

V 2 1 削減

削減とは置語副詞がその成分の持っている意味項目を全部ではなく、一部分しか受け
継がず、他項目が削られたことを言う。

まず、「うまい」と「うまうま」の例を見ると、

うまい……うまいです、この鰯は。 (北杜夫『榆家の人びと』)

とうとう彼女はその条件で承知したのだが、米国はそれでもって更にうまい商売
をした。 (北杜夫『榆家の人びと』)

全世界通用する十円札で、うまうまと彼からお八つの菓子を購入したりしたので
ある。 (北杜夫『榆家の人びと』)

彼が、この峻一が、まかり間違えば逮捕されるほどの危険を冒して、うまうまと
その秘密を探ってきたのだ。 (北杜夫『榆家の人びと』)

のような例では「たくみなやり方で、人を思う通りに動かすさま」の意を有している置

語副詞「うまうま」は成分「うまい」の持っている意味の一つ「自分にとって都合いい。もうけになる」という意味につながりが見られるのみである。

「近い」と「近々」の場合では、

また縮を晒し終るといことは雪国が春の近いしらせであったらう。

(川端康成『雪国』)

当面の生活に没頭しなければならぬ人々に対して、私達は尊敬に近い同情をすら捧げねばならぬ悲しい人生の事実だ。(有島武郎『生まれ出づる悩み』)

伝太郎の家に集まった三十人近い同志は一年ぶりに会う志方の精悍の顔を、もの珍しそうに眺めた。(渡辺淳一『花埋み』)

平中は独り寂しそうに、本院の侍従の局に近い、人気のない廊下に佇んでいる。

(芥川龍之介『芋粥』)

五十八歳の母に近々に死が訪れることはごく当たり前のことであった。

(渡辺淳一『花埋み』)

女が黒い眼を半ば開いているのかと、近々のぞきこんでみると、それは睫毛であった。(川端康成『雪国』)

[近い]の項目には「①あまり離れていない。(ア)距離が短い。(イ)時の隔たりが少ない。間(ま)もない。(ウ)間柄が密だ。親しい。ちかしい。(エ)《連体形で》血縁がそう離れていない。(オ)性質・内容が似ている。②『目が近い』近眼だ。」などの意味が挙げられているが、「近々」では「①近いうちに。きんきん。②くつつきそうなほど、近い距離に。」の意味しか挙げられていない。つまり、「近い」は時間、距離、性質、状態などについて言われるのに対して、「近々」は時間、距離についてしか言われないのである。また、同じ時間を表すものと言っても、「近い」は「近い昔」というように、過去を言う場合にも用いられるのに対して、「近々」は近い未来の場合にしか用いられないという違いがある。いわば、置語副詞の修飾範囲は成分の形容詞より制限されているのである。そのほか、「早々、長々、軽々、こわごわ、こまごま、のろのろ、広々」なども削減の例として挙げられる。

V 2 2 添加

添加とは置語副詞が成分の持っている意味の全部、或いは一部分だけを受け継いだうえに、成分の持っていない新しい意味を加えたことを言う。この新しい意味は成分の意味とかかわりがありながら、成分の意味だけでは説明できないものである。例えば、

「高い」と「高々」を比較してみると、「高々」の有している「①どんなに多く見積も

っても。せいぜい。②目立って高いさま。」の①の意味は形容詞語幹「高」を重複させることによって出来た意味なので、成分の持っていない、添加されたものである。「高々」は普通「高々十人しか来ないだろう」というように、否定的に使う場合が多く、客観的でなく、話し手の主観的な考えで、判断、推測する場合の表現として用いられるものである。それは、客観的に物事の距離、格式、程度、音声、価値などを表す成分の「高い」と違ってくる。

「寒い」と「寒々」の例を見ると、

誰が年の暮にこんな寒いところへ来るものか。 (川端康成『雪国』)

ある雪のつもる寒い冬の日、学校が休みとなり、彼女をいたく喜ばせた。

(北杜夫『榆家の人びと』)

山峡は日陰となるのが早く、もう寒々と夕暮色が垂れていた。

(川端康成『雪国』)

外観こそそうす汚れ、壁際に堆く積まれた石炭があたりの風景をいっそう寒々とさせていたが、 (北杜夫『榆家の人びと』)

というように「寒々」が成分の「寒い」の持っていない「殺風景」を意味し、「寒々」という形がもつ独特な意味である。そのほか、「たまたま、しみじみ、いやいや、みちみち」などが同様の例として挙げられる。

「泣く」と「泣く泣く」、「泣き泣き」の場合になると、

私は腹立たしさと寂しさとで、いくら泣くまいと思っても、止め度なく涙が溢れてきた。 (芥川龍之介『袈裟と盛遠』)

話さえすれば泣く、泣けば私が悪かった悪かったと云って居る。

(伊藤左千夫『野菊の墓』)

私は泣く泣く俊寛様へ、姫君の御消息をさし上げました。

(芥川龍之介『俊寛』)

自分も其時悲しかったことと、お松が寂しい顔をうなだれて、泣き泣き自分を村境まで送ってきた事が忘れられなかった。 (伊藤左千夫『守の家』)

のように、「泣く泣く」と「泣き泣き」が成分の「泣く」と比べて、顕著になにか新しい意味が生じたとは言えないかもしれない。しかし、「泣く泣く」と「泣き泣き」が「泣きながら。泣きたいほどの気持で」というように解釈されるのが普通であって、その動作の継続・反復の意味や、そこから派生した「つらい気持」の意味は成分の「泣く」には含まれていない。その継続・反復性は「泣く」+「泣く」という動詞成分の重複によって生じたもので、置語形式全体として継続・反復の意味を帯びていると考えざ

るをえない。

以上見てきたように、この類の置語副詞は、成分と共通の意味を持ちつつも、成分にない意味を新たに加えたものである。

V 2 3 転義

前の二類が成分の意味を受け継いでいるのに対して、この類に属する語群は成分の意味とのつながりがそれほど明白でない。しかし、まったく断絶しているとも言えず、なんらかのかかわりがあって、そこからある意味が派生してきたのである。この意味は成分の意味からは引き出せない、置語形式によって付与されたものである。

「薄い」と「薄々」の場合を見ると、

台の上の打敷は、薄紫の、薄い絹である。 (田辺聖子『新源氏物語』)

女はのろのろと、太郎の前に、茹で卵一個と、薄いコーヒーの入った部厚いコップを置いた。 (曾野綾子『太郎物語 大学編』)

その人がどうやら、実の母らしい、その人は「明石の上」と呼ばれるところを見ると、明石からきた人らしい、ということは薄々、気付いていらしたものの……。

(田辺聖子『新源氏物語』)

そういうお師匠さんの心のうちは、息子さんも私も薄々知ってたの。

(川端康成『雪国』)

つまり、誰だって、ホステスの家庭の事情くらい薄々察しているとは思うんですけど、 (曾野綾子『太郎物語 大学編』)

黒谷夫人もうすす感づいたようだった。 (曾野綾子『太郎物語 高校編』)

のように、「情報・事情がぼんやりしか分かっていないさま」の意味で用いられている「薄々」は、成分の「薄い」の持っている「①厚みが少ない。②色や味の程度が弱い。

③密度が低い」の三つの意味のどれも直接に反映していないが、成分の表している程度・密度の弱さ、低さにつながりが見られる。これは「知る、気付く、察する、感ずる」など感覚認知動詞と共起して用いられるのが普通である。つまり、成分の「薄い」が物事の状態、性質を描写するのに用いられるのに対して、置語副詞の「薄々」は感知、推察の程度を表すのに用いられるようになっている。

VI おわりに

以上の考察は、置語化に伴って成分の意味がどのように変わるかの大要を見たものである。これにより、置語とその成分の意味の変容の主な傾向を次のようにまとめることが出来る。

- 1) 意味分野では、畳語副詞が「抽象的關係」に比較的厚く分布している点では成分と共通しているが、各意味項目における語数において、両者に差が見られる。特に各成分のものが重複して畳語副詞の3.16「時・頻度」の項目に集中してきた傾向が見られる。
- 2) 成分が畳語副詞を構成していくうえで、形容詞、形容動詞、副詞成分による畳語副詞が成分との間に意味項目間の変動のないものが多いのに対して、名詞、動詞成分による畳語副詞は変動のあるものが多い。
- 3) 畳語副詞には成分の意味がほぼ保持されているものと変質しているものが見られる。いわば、畳語副詞の意味は直接に、或いは間接に成分の意味とかがわっている。
- 4) 成分が変質しているもののうち、量的に言うと、削減、添加、転義の順に漸減する。ということは一般的に変質しているものの中には、成分の一部分の意味をそのまま受け継いでいる畳語副詞が多いということになる。
- 5) 音象徴成分の畳語を除けば、畳語副詞は成分より指示内容が単純で、修飾範囲も制限されている。

注

- ①『品詞別日本文法講座5 連体詞・副詞』(1973)所収
- ②小論でいう音象徴成分は、大半が副詞成分と重なるものであるが、数が多いので、別個として立てた。
- ③拙稿「畳語副詞の構成」北京日本学研究中心第十届日本学国際学術研討会口頭発表 2000.9
- ④拙稿「成分から見た畳語副詞 その意味機能を中心に」韓国日本語教育学会第33回学術発表大会口頭発表 2000.8
例文は「新潮文庫100冊(CD-ROM)」による

参考文献

- 国立国語研究所(1964)『分類語彙表』秀英出版
- 玉村文郎(1973)「運用修飾句ナクナクについての覚え書き」『同志社国文学』9
- ゆもとしょうなん(1977)「合わせ名詞の意味記述をめぐって」『東京外国語大学論集』27
- 斎藤倫明(1984)「複合動詞構成要素の意味 単独用法との比較を通して」『国語語彙史の研究』5
- 金田一春彦・池田弥三郎 編(1988)『学研国語大辞典』(第二版)学習研究社
- 西尾実 他編(1994)『岩波国語辞典』(第五版)岩波書店
- 斎藤倫明(1995)「語構成と意味 合成形容詞「～くさい」を例として」『国文学 解釈と鑑賞』60 1
- 森岡健二 他編(2000)『集英社国語辞典』(初版)集英社
- 山田俊雄 他編(2000)『新潮現代国語辞典』(第二版)新潮社

(付記) この論文を成稿するにあたって、指導教授の玉村文郎先生にいろいろご指導をいただきました。心から感謝の意を申し上げます。また、編集委員の藤井俊博先生にも、多くのご教示をいただきました。お礼を申し上げます。